家族の年長者の特性と能力についての考察

私の人生のこの第三段階において、最もやりがいを感じた活動の一つは、人類社会に属するこうした素晴らしい長老たちとの親密な関わりを通じて、彼らの資質と能力を研究することでした。私は彼らの知恵から多くの恩恵を受けただけでなく、地域社会に奉仕する彼らの人生を目の当たりにできたという恵みを、さらに深く実感しました。長老たちがもたらす希望、知恵、そして回復力という賜物によって、人間社会が絶えず再生され続けるのは、まさに彼らの奉仕のおかげなのです。

私がこの文章を執筆したのは、家族の年長者たちの資質や特徴を述べる中で、読者の皆さんがご自身の家族の中で誰がこの役割を担っているか、そしてその人物がどのような資質を体現しているかを想像していただければと願ってのことです。

人類の歴史および先史時代には、人間社会の継続において長老たちが果たしてきた極めて重要な役割が記録されています。成功を収めた文化はすべて、そうした人々の地位を反映していますが、衰退していく多くの文化は、その地位の欠如を反映しています。では、私の研究、経験、そして真の長老たちへの観察から、何が得られたのでしょうか？[1]

---

1 多くの読者は、長老たちが家族や地域社会においてどのような奉仕を行っているのか知りたいと思うかもしれません。彼らは何をしているのでしょうか？彼らは、地域社会の福祉を日々気遣うことを通じて、その社会が生活様式に適応するための手段を提供し、繁栄した状態で第五世代へと至るための意思決定を行い、その後も多くの世代にわたって彼らが繁栄できるよう支援しています。彼らの奉仕は、何よりも思いやりに満ちており、問いかけ、傾聴、そして謙虚さに根ざしています。 これらの資質が一体となって、コミュニティをその手の中に抱き、安全に進化させ、存続させる長老の、経験に裏打ちされた助けの手を形作っている。私の著書『家族：世代間の契約』の第9章（107〜113ページ）および第12章（139〜141ページ）では、長老たちが何をしているのかというこの問いについて論じている。107ページでは、部族が長老たちに与える「四つの
権威」を列挙している。それらは、引用すると次の通りである。「(a) 部族内の紛争を調停し、すべての構成員が自分の声が聞かれていると感じられるようにする権威。紛争の裁定によって、ある者は勝者、別の者は敗者だと感じるような結果になってはならず、それは部族の絆を破壊するものである；(b) 部族が採択した意思決定のルールに従っていない場合、部族全体に助言する権威。 長老たちは決して自らそれらの規則を作ろうとはしません。（c）部族の物語を語る権限。（d）部族の儀式や、それらを記念する式典を継承するための慣習を維持し、実行する権限。これらの儀式は、部族にとって最も重要な人生の節目を示すものです。すなわち、子供たちが大人になること、主に結婚や人生のパートナーシップを通じて親族関係を持つ新たなメンバーが部族に加わること、部族のメンバーが長老の地位に到達すること、部族
の死、そして平和と戦争のための新たな首長の選出。」

人類という種が20万年にわたる存在の歴史を通じて経験してきた本質は、3つの主要な人生の段階を経て進化してきたことにある。第一の段階：幼少期から青年期にかけて。第二の段階：成人期、すなわち世帯主、親、そして天職を見出しそれに従事する者としての段階。第三の段階：精神の探求、あるがままの存在、行動ではなく在ること、社会への還元、利他主義、そして生み出す力への探求である。 私が知る長老たちのほぼ全員が、この進化の過程を経ており、その人生は第三の段階によって特徴づけられている。

しかし、例外もあります！確かに、年齢を重ねることで経験を通じて知恵が得られることは多いですが、必ずしもそうとは限りません。現代の状況を見ると、

主流層である「ベビーブーマー」は、

60代に差し掛かっても、高齢者へと進化していないことを示唆している。その代わりに、彼らは人口集団として支配的であった期間を通じて特徴的だったのと同じナルシシズムや「自分中心主義」を、今もなお示し続けている。年齢は、利他的な在り方の成熟——真の「長老」となることに繋がる在り方——へと導いていないようだ。

間違いなく、私のこの主張は異論や反論を招くだろう。それらには敬意を表する。

また、非常に若くとも深い知恵を持ち、地域社会の中で長老のような役割を果たしている人々を、私は数人観察してきた。 多くの場合、真の長老たちは、特別な指導を行うために若者を積極的に探し出します。こうした長老たちは、やがて若者たちが、コミュニティのリーダーシップというより広い世界において、自分たちの後を継ぐ存在になることを知っているのです。この「見出し」と「指導」のプロセスは真の長老に特徴的なものであり、成功を収めてきたあらゆる社会で実践されてきました。ですから、確かに、「人生の第三段階にある悟りを開いた個人だけが長老である」というルールには例外は存在します。しかし、それらはあくまで例外に過ぎないのです！

では、家族の長老にはどのような特徴があるのでしょうか？ここでは家族の長老について書いていますが、これらの特徴はすべての長老に当てはまると思います。「disc」で始まる一連の単語が、それを最もよく表しているように思えました。 頭に浮かんだのは、「discernment（識別力）」、「discreet（慎み深い）」、「discretion（裁量）」、「discipline（規律）」、「discovery（発見）」という単語と、それらが表す能動的な意味、すなわち「識別する」、「慎み深くある」、「裁量を行使する」、「規律を守る」、「発見する」という状態です。これら5つの卓越した在り方が、すべて同じ頭文字、つまり同じ音で始まるというのは、なんと不思議なことでしょう。長老において、これら5つの特質は何を意味するのでしょうか？

識別力／識別する姿勢

長老は、自身の内なる[2]能力によって、家族共同体で直面するあらゆる問題において、単に事実が示唆する内容にとどまらず、より大きな真実がどこにあるかを見極めることができます[3]。彼女がこれができるのは、人生の旅路の一部として、発見し、定義することを学んできたからです。彼女は、この学び得たプロセスを用いて、他者が自らの真実を明らかにできるよう支援します。彼女は、問題のあらゆる可能性のある事実を精査し、その核心や根源を見出すことで、自らの真実を見出します。 彼女は自らの発見を絶えず問い直します。一方では客観的に「事実は明確かつ疑いようのない答えへと導いているか？」と問い、他方では主観的に「私の直感は現実から遠ざけているのか、それとも現実へと近づけているのか？」と問います。問題の真実を見極めた後、彼女はその問題を浮き彫りにしたコミュニティ内の不一致点を検証することで、コミュニティがその問題に対応する道を築き上げます。 彼女の提案は、コミュニティが持つ回復力ゆえに、コミュニティが適応できるものである。思考するコミュニティが統合できる対応、コミュニティを強化し、害を与えることで妥協することのない対応である。このようにして、彼女はその問題が提起する問いが持つ深さと複雑さ、そしてそれを生み出したコミュニティがそれを解決するための最善の手段を見極める。彼女は「見極め」を実践しているのだ。

---

2 私はこのエッセイにおいて、女性形を用いることを選んだ。これは、ペルシャ、ギリシャ、ローマ、ユダヤ教、仏教の霊的道が、成熟した女性の精神こそが純粋な知恵の体現であると正しく捉えているという信念に基づくものである。これらの伝統は同様に、成熟した男性の道を純粋な慈悲の体現と見なしている。 自身の伝統が逆の考えを示しているため、これを意外に感じる読者もいるかもしれないが、私が真の長老たちから得た経験によれば、彼らは深い慈悲心を持っている一方で、むしろ「無限の知恵」を持つ存在として特徴づけられる。3 私は常に「家族の長老」について語っているが、このエッセイの残りの部分では「

「コミュニティ」という言葉をこのエッセイの残りの部分で一貫して使用します。「家族」と「コミュニティ」という言葉を、互換性のあるものとして用いるつもりです。

慎み／慎み深さ

長老とは、すべてを聞き、すべてを見、すべてを感じ、すべてを経験しながらも、ほとんど、あるいは何も語らないという能力の体現者である。彼女は、家族全員が最大の悩みを打ち明けるために頼る存在だ。誰もが、明示的な許可がない限り、彼女に打ち明けたことは決して漏らさないと知っている。また、コミュニティの各構成員は、長老がその情報を、その個人とコミュニティ全体の利益のために、彼女が適切と判断する形で、コミュニティ内で維持しているつながりの網の目の中で活用することを、暗黙のうちに理解している。

その個人とコミュニティ全体の利益のために、彼女が適切と考える通りに活用することを、暗黙のうちに理解している。慎重であるということは、すべての人にとって最良の結果を得るために、いつ透明性を保ち、いつ不透明さを保つべきかを理解することである。

彼女は、自分のコミュニティがどれだけの真実を受け止められるかを理解している。彼女の慎重なコミュニケーションの仕方は、コミュニティの絆を結びつけ、強固にするという彼女の働きにおいて、忍耐強いリーダーシップを示している。こうした長老たちは、私たち一人ひとりの人生、そしてコミュニティ全体を織りなす糸を紡ぎ、織り上げる「織り蜘蛛」なのである。

節度／節度の行使

長老は、その問題に関わるすべての人の意見に耳を傾けた後、コミュニティの問題のあらゆる側面について絶えず熟考する。彼女は、自分が間違っている可能性を非常に真剣に受け止めている。 コミュニティの最重要課題における最終的な裁定者として、彼女は自身の権威の中に、コミュニティの持続的な健全性の種も、あるいはその崩壊の種も内包されていることを理解している。また、彼女は自身の血筋に連なる数十人の長老たち、あるいは現存する一部のコミュニティにおいては数十世代にわたる長老たちの知恵を継承していることも深く認識している。彼女は、今日の自分の役割を可能にしてくれた七世代前の先人たちを敬うのと同様に、自分が下すあらゆる決定が、今から七世代先まで尊重され続けることを知っている。 また、彼女は、コミュニティの歴史を通じて自身の血筋が築き上げてきた意思決定のプロセスを維持し、再確認することほど重要な決定は一つもないとも感じている。 それゆえ、彼女は忍耐強く、慎重であり、意思決定においてはじっくりと熟考を重ねる。意見を持つすべての人々の声に耳を傾けた後、生涯にわたり共に歩んできた関係を通じて、他者よりも「すべての人にとって何が最善か」という洞察力や利他心に優れていると彼女が認識している人々の声に、改めて耳を傾ける。

最後に、彼女は目の前の問題について、先祖に知恵を求めます。このようにして、彼女は自身の特徴である「分別」を発揮しているのです。その分別を形作る内省力と慎重さこそが、彼女のコミュニティが、儀式によって厳粛に執り行われる古来の正式な儀式を通じて、彼女を長老に指名し、その地位に就かせた理由なのです。

規律／規律に従うこと

人間はしばしば、規律を課されることを嫌がり、思考や行動を一貫して律しなければ、私たちは子供同然のままであることに気づいていない。長老の特徴の一つは、人生のあらゆる場面における彼女の振る舞いが、内なる規律――

不変性、一貫性、忍耐力、寛容さ、そしてユーモアによって規定されている。他者が彼女に信頼を寄せることができるのは、節度によって鍛え上げられた長老の「思慮深さ」という美徳があるからだ。長老は生涯を通じてこれらの振る舞いを培い、それによって、直面するあらゆる状況に、落ち着きと平穏、そして威厳をもって穏やかに適応することができる。このような在り方において、彼女は規律そのものであり、自らも規律に身を委ねているのである。

発見／発見の芸術

長老は、自身の部族を構成する複雑なシステム――すなわち、（a）部族の各構成員一人ひとりの、変化し続ける人生、（b）部族内の各家族、（c）部族内の各氏族、（d）部族全体、そして（e）その社会を形成する他のすべての部族との複雑な関係――を観察し、評価し、発展させていく直感的な能力を通じて、この特質を発揮する。 彼女は日々、部族の各メンバーの生活を観察し、一人ひとりの持つ独自の才能を見出し、その成長を促すことに努めている。彼女は、一人ひとりの人生が

部族の存続に何か前向きな貢献をする。彼女は、その貢献がどのようなものになるかを把握しようと努め、その個々のメンバーがそれを提供できるよう、優しく手助けする。

彼女の手法は、「問いかけ、問いかけ、問いかけ！！」 常にまず自分自身に問いかけます。彼女は自分の真実を歪めてはいないか？ 耳にしたことや観察した事柄について、自分自身に誠実であるか、それとも部族や個々のメンバーの最善の利益ではなく、自分の欲望に合わせて真実を曲げようとしてはいないか？ この発見の過程で、彼女は自分自身について何を学んでいるのか？ 自分自身について発見したことを統合し、その新たな自己認識が、客観的・主観的な自己の両方を変えることを理解できているか？ もしかすると

彼女は生涯学習者であることをやめてしまい、自分自身や他者を発見する喜びが消え失せたがゆえに、使い古された答えしか提供できなくなってしまったのだろうか？　神よ、どうかそうではないことを願う。彼女は自分自身に問いかけ続けることをやめて「専門家」となり、それによって「長老」であることを失ってしまったのだろうか！！！

部族の家族たちに対しては、各家庭が成長する過程で直面する複雑な問題について、しばしばユーモアを交えながら、穏やかな調停役を務める。若い親たちにとっては、彼女は家長であり、常にそばにいてくれる母のような祖母であり、その腕の中で泣き叫ぶ子供たちは落ち着きを取り戻し、過度に忙殺されている母親たちは一息つき、バランスを取り戻す時間を得ることができる。 年長の子供を持つ親たちには、子育てや教育、そして子供たちの夢を現実のものにする方法について知恵を授ける。また、親たちの個人的な生活や夫婦関係におけるストレスが危機を招きそうな時には、穏やかな仲介役を務める。家族全体に対しては、

メンバーのライフサイクルや人生の転換期に伴う自然な浮き沈みを乗り越えられるよう、調停を行います。

最後に、語り手として、彼女は部族全体が自らの系譜を絶えず再発見できるよう手助けします。彼女は、人々が「七世代先を見据えた思考と想像」を行えるよう導くことで、現在がなぜそのようになっているのかを理解し、その現在の中に未来への道筋を見出せるようにします。彼女は、自身の個人的な旅路や、彼女のメンターたちの物語を語る。彼女は、コミュニティの系譜に関する物語——その成長や崩壊、英雄やヒロインたちの物語、善と悪、豊作と飢饉、創造と衰退の物語——を語る。その物語は常に、寓話や比喩、逆説を通じて語られる。彼女は鳥のように歌い、演説家のように語りかける。聴衆の想像力をかき立てるために、彼女はペルソナを変え、仮面舞踏会のような演出を繰り広げる。 異国情緒あふれる衣装と声で、彼女は、現在の危険や不安に苦しむ人々を助ける。それは、他者が同じ激流を無事に乗り越えた道筋を示す特定の物語を語ることで行われる。彼女は、この物語という贈り物を捧げることで、人々が「無事に通り抜けた」という想像上の体験を、現在の困難に直面した際に実際にその行動として実践できるようにするのだ。彼女は、聴衆の心と精神に働きかけ、彼らの人間性とのつながりを深め、創造の中での自らの位置を見出すよう促す。

こうして、彼女自身の部族の各構成員、その家族、氏族、そして彼女自身の人生における個々の旅路を発見する過程で、自己や他者への問いかけという手法を用い、物語の語り手として、彼女は「発見」という特質と芸術を体現している。

こうして私たちは、この長老の振る舞いが、彼女の行動を定義し支配する特性として、「識別」「慎重さ」「節度」「規律」「発見」という五つの特質をどのように体現しているかを学んだ。彼女の在り方は、その真摯さを証明するとともに、

知恵の姿を映し出している。私たちの先祖が、知恵の女神――ペルシャ人にとってはアスタルテ、エジプト人にとってはイシス、ギリシャ人にとってはアテナ、ローマ人にとってはミネルヴァ、ユダヤ人にとってはソフィア、仏教徒にとってはターラ、そしてキリスト教徒にとっては賢明な長老の女性としてのマリア――を想像した際、これらこそがそれぞれの女神を定義する特質であったことは、驚くべきことではないと私は考える。私たちを人間として定義づける行動、そして私たちの中に数少ない「長老」と呼ばれる人々の行動に対する先祖たちの観察において、彼らは今日私たちが示しているのと同じ意識を示していたのではないだろうか。長老の資質に対する先祖たちの観察、そしてそれらの資質がこれらの賢明な女性たちに現れている事実は、はるか昔と同様に、今日でも力強く存在している。

「その人が長老かどうか、どうやって見分ければよいのか」と疑問に思う方も多いでしょう。これらの特質を兼ね備えた人物は、表立っては目立たず、脚光を避け、その性質上、見つけるのが極めて難しい存在ではないでしょうか？ 健全な自嘲の精神が何らかの形で彼女に内在しており、謙虚さと慎み深さが規範的な振る舞いである以上、彼女自身でさえ自分が長老であることに気づいていない可能性さえあるのではないでしょうか？ そうです、彼女を見つけるのは難しく、鶏の歯ほども稀な存在なのです。 [4] では、どうすればそのような人物を見つけ出せるのでしょうか。私の現在の考えは、ご自身の家族やコミュニティの枠組みの中で、そのコミュニティの集まりへの招待状を送れば、誰もが受け取った瞬間に喜んで参加を承諾するような人物を探すことです！ 家族やコミュニティがその長老、あるいは長老たちへ贈る贈り物とは、まさにこの「集まりを招集する権威」なのです。

私は、私たちが彼らを「長老」として認識するのは、まさにこの「招集する権威」によってではないかと考えるようになった。一年間に受け取る招待状の数を少し考えてみてほしい。そして、そのうちのどれほど少ない数しか受け入れないか。もちろん、義務感から受け入れるものもあれば、責任感から、社会的地位への意識から、喜びから、あるいは欲から受け入れるものもある。しかし、そのほとんどは不本意ながら、時間を奪われるという感覚を抱きつつ受け入れている。即座に受け入れる招待は、いったいどれほどあるだろうか。 なぜでしょうか？　それは、私の長老が私を招いてくれるから――それだけのことです。私がそこへ行くのは、彼女の集いに立ち会わなければ何かが欠けてしまうと感じるからであり、便利だからとか社会的に重要だからという理由ではほぼ間違いなくありません。むしろ、それは彼女の共同体の構成員としての私の心に響く呼びかけであり、私はその一員としてそれを受け入れるのです。さらに、もし私が後悔することになったとしたら、それは私がその共同体の構成員でなくなったからではないでしょうか？ それは、私がその長老の声を聞かなくなったからではないだろうか？　だからこそ、私は気兼ねなくそれを無視できるのだろうか？　こうして、長老は、コミュニティのメンバーを対話のために招集し、その儀式や式典を再確認し祝うために招き、調停のため

に招き、そして物語を語り、その系譜との再接続と伝承のために招くという、招集する権威を通じて現れるのである。

確かに、私たちは彼女を知っている。とりわけ、彼女が家族共同体から授けられた、特に「招集者」としての正式な権威の役割を担うとき、最も容易かつ明白に彼女を認識できるだろう。 同様に、彼女が日常的な非公式なリーダーシップの役割を果たし、見極めや慎重さ、経験から得た節度を交えた判断力を通じて知恵を発揮しているとき、また、彼女が奉仕する人間的な絆の共同体の維持と繁栄のために、絶えず花開く血筋の知恵を絶えず発見し、それとのつながりを再構築しているとき、私たちは常に、彼女を見出すのが難しいと感じるでしょう。

家族の長老の資質や特徴についてある程度理解できたところで、皆さんの想像力が刺激され、ご自身の家族の長老が誰であるか、そして彼らがどのような資質を体現しているかを観察していただければと願っています。

© ジェームズ・E・ヒューズ・ジュニア、2011年3月

---

4 世界における長老の役割の素晴らしい例として、ハシディズムにおける「ツァディク（義人）」という概念が挙げられます。これは、いつでも7人あるいは30人（私は両方の数字を耳にしたことがあります）の個人が存在し、その人生が人類を支え、人類の生存に必要なバランスを提供しているというものです。これらの義人たちは、自らの義人としての仲介能力を自覚しておらず、千年にわたり、誰にも見られず、聞かれず、感じられることもなく、ただ崇められてきました。